

## 低学年でもできる「自分を表現し、人の話を聞く」方法の研究

- 生活科における落花生栽培や各種行事での交流を通して -

小学校2年 生活科  
三重県一志郡美杉村立太郎生小学校

森田雅浩

キーワード 小学校、生活科、インターネット、テレビ会議 学校間交流

### 【概要】

テレビ会議は、高学年の子どもだけのものではない、低学年でもできる自分の表現の仕方を、テレビ会議を通して追求した。子どもたちは少しずつ、自分の考えをまとめて発表し、相手の話もしっかりと聞くことができるようになってきた。

### 1. 表現すること

表現の方法にはいろいろあると思うが、中でも「絵で表現する」「文字で表現する」「言葉で表現する」ということを中心に、いろいろな活動をしてきた。

#### < 絵 >

観察をした後は個人で、地域探検をした後は班でまとめをするようにした。その際には、デジタルカメラで撮影した画像をプリントアウトして貼り付けたり、自分たちで絵を描いたりした。もちろん、デジタルカメラでの撮影も、子どもたちがおこなった。

#### < 文字 >

いろいろな場面をとらえて、作文を書くようにしてきた。何かの行事があったときや探検に行ったりしたときには、必ず書くようにしてきた。普段でも、「あのねノート」に家であったことや友だちと遊んだときのことなどを書いたりした。

#### < 言葉 >

テレビ会議による交流会をおこなう際には、調べたことや分かったことなどを自分の言葉で言えるようにしてきた。メモ程度の簡単な原稿は書くが、きちんとしたシナリオは作っていない。何を言うかが決まったら、自分で文を考え、自分の言葉で言うように心がけさせた。

### 2. テレビ会議による交流

この研究における一番のメインは、落花生(+野菜)の栽培を通して観察したり経験したりしたことを他校の子どもたちと交流することである。(もちろん、これだけではなく、いろいろな場面においても)

自分を表現することについては、(a)絵で表す(b)文で表す(c)言葉で表す(d)動作で表すなどの方法がある。これらのことと人の考えを聞く力を付ける方法として、テレビ会議による手法を取り入れた。

テレビ会議をおこなうには、まず自分が発表する課題を的確に把握しなければならない。そして、いろいろと調べたことを図表や画像にまとめる。次に発表するための文(セリフ)を考えていかなければならない。実際のテレビ会議の場面では、遠く回線の向こうにいる人たちにもよくわかってもらえるように、コンピューターの向こうにも友だちがいるんだという意識を持って話し方も工夫していかなければならない。また相手の話を集中してしっかりと聞くことによって、質問をしたり感想を持ったりもできるようになる。これらの活動を通して、「自分を表現し人の考えを聞く」ことのできる子どもを育てようと考えた



学校間交流をおこなっていく上で取り組んだ飼育・栽培活動は、(a)野菜の栽培(落花生・スイカ・トウモロコシ・キュウリ・ミニトマト)(b)飼育(カイコ・ザリガニ・インコ)で、そのほかに地域探検もおこなった。

中でも長期に取り組んだ落花生は、子どもたちにとっても大人にとっても興味深いものだった。なぜかという、子どもたちはほぼ全員が、大人でも多くの人が落花生の実がどこになるか知らなかったからである。

5月上旬に種まき、10日ほどで発芽した。当番を決めて、水やりや施肥をしていった。発芽したときの尖った葉から丸い葉となり、だんだんとその数も増えていった。

そのような頃に、スーパーで売っていた落花生を買ってきて食べてみた。みんなで「おいしいね」と言いながら食べているうちに、あっという間に袋は空っぽ。そこで、「この落花生の実は、どのようにして、どこに生るんだろう。」ということで想像して絵に描いてみた。子どもたちは、これまでの生活・学習経験から、大豆などの豆類と同じように枝から生っている絵を描いた。この場では、それ以上のことは考えさせず、「実が生るまで育てて確かめてみよう」ということ

にした。

6月頃から、テレビ会議による学校間交流を始めた。昨年度まではインターネットのみでテレビ会議による交流をおこなってきたが、本年度はISDNによるテレビ電話での交流もおこなうことにした。インターネットでは、国内の3小学校と海外にある日本人学校2校との間で、テレビ電話では奈良県にある本校と同じような山間部の学校との間で交流をおこなった。その回数は、のべ10回。その他に、担当者同士で事前の通信実験と打ち合わせのためのテレビ会議も相当回数おこなってきた。

### 3. 交流の実際

#### (1) 事前準備

落花生を育てながらかんさつを進めていると、ときどき子どもたちから、「 になったから、みんなに教えてあげたいね。」という言葉が出てきた。例えば、「丸い葉がたくさん出て、大きくなってきたから」「花が咲いてきたから」

その都度、交流を設定している学校に声をかけて、お互いが育てている野菜のことやその土地のことなどを交流するテレビ会議を仕組んできた。

子どもたちは、まず何を伝えるのかを考え、資料を集めていった。観察記録や、デジタルカメラで撮影した画像などを中心に、発表の内容を考えていった。休み時間には、何人かで集まって発表の練習する姿も見られた。

担任は、それぞれの準備段階でアドバイスをすると共に、あらかじめ相手校と通信実験を兼ねて打ち合わせを進めた。

#### (2) 交流当日

1学期の間は多目的教室のコンピューターとプロジェクターを使ってテレビ会議を進めてきたが、夏休み中に機器の更新がおこなわれ、教室からもテレビ会議がおこなえるようにあった。そこで、コンピューターとプロジェクター、黒板にはマグネット式のスクリーンというセッティングでのテレビ会議をするようになった。

初めの頃は担任が司会・進行をしていたが、途中からは最初の口火を切るところだけを担任がしたあとは、司会・進行も含めて子どもたちが進めるようにしていった。

テレビ会議の時には、簡単なワークシートを持たせて、相手の話をメモしたり自分の質問をまとめたりした。ただ子どもたちは、どうしても書くことに気が行ってしまって聞くことがおろそかになることがよくあったので、メモを取ることにについてはあまり強く指導はしなかった。それよりも、まず聞くことに集中するようにしていった。

話をするときには、目の前にあるカメラの向こうにもたくさんの友だちがいるんだということを常に意識しながら、ゆっくり・はっきりと話すように心がけさせた。何回かのテレビ会議をしていくうちに、お互いに「ちょっと話す速さが速いよ。」「うん、ちょうど良いくらい。」とアドバイスができるようになってきた。

#### (3) 事後指導

テレビ会議が終わったあとは、それぞれが反省も兼ねて作文を書いた。良かったところや悪かったところを書き出すことによって、次回の目当てを作るにつなげていった。

また感想をまとめて、相手校にメールで送るようにした。そうすることによって、相手校でもいろいろなことがわかり、お互いの進歩につながっていった。

### 4. まとめ

この実践を通して、どのくらいの力が子どもたちに付いたかということは、はっきりと数値化もできないので「こんな力がこれだけ付きました」と言うことはできない。あくまでも担任の主観での判断になるが、1学期・2学期・3学期と実践が進むにつれて、

(a) 相手を意識して、速さや声の大きさを加減しながら話せるようになってきた。

(b) 少しずつ長い時間、集中して人の話を聞けるようになってきた。

(c) 最初のころは、「楽しかった。」「またやりたい。」というような簡単な感想しか持てなかったのが、「自分が発表したことを聞いて、よくわかりましたと言ってくれたのでうれしかったです。」というようにより具体的な感想が持てるようになってきた。

ように思われた。

最近はいろいろなソフトやCCDカメラ・キャプチャーケーブルなどが販売されて、比較的簡単にテレビ会議がおこなえるようになってきた。しかし、まだまだインターネットへの接続環境に不安定な要素もあるので、いつもうまくテレビ会議ができるとは言えない。これからも、いろいろな失敗を繰り返しながら、子どもたちと一緒にテレビ会議を作り上げていくように心がけていきたい。